

〔巻頭言〕

テレビの映すマレーシア

加藤 剛

マレーシア研究事始

1972年初頭にスマトラの村でフィールドワークの第一歩を踏み出し、インドネシアにおける臨地研究を開始した私が、マラッカ海峡を越えてマレー半島にまで足を伸ばすようになったのは、1986年2月のことである。日本学術振興会とマレーシア大学副学長会議の一般協定プログラムのもと、日立国際奨学財団の支援を受け、マレーシア国民大学のシャムスルさんと一緒に共同研究プロジェクトを立ち上げたのがきっかけだった。その経緯と最初の調査報告は他所に特集として載っている（『東南アジア研究』26(2)、1988年9月特集号）、ここで説明することはしない。特集の前文で言及しなかったことといえば、当時の京大東南アジア研究センターの同僚・前田成文（現・立本成文）氏に上手に話を持ちかけられ、前田マジックに乗せられた感が無きにしも非ずだったが、「まっ、いいか。自分の研究対象ミナンカバウと深い歴史・文化的関係にあるヌグリスンビランを歩くのも面白いかもしれない」、といった軽い気持ちで、日本側責任者の任を引き受けたことである。

まったくの偶然から、そして深慮とは遠いところで、事は始まった。

瓢箪から駒の幸せ

「瓢箪から駒」の縁だが、マレーシアに足を伸ばすことになってつくづくよかったと思う。ふたつの国と社会には、似ているようで意外と違うなというところが多々ある。そこで、「どうして?」、私の現職場での学部生相手の口癖ではないが、それまでとは違う学問、つまり「問うことを学ぶ」をするようになったのである。

たとえば、ミナンカバウ男性は昔から出稼ぎ商人を輩出することで有名で、この現象の説明として、男に安定した社会経済的場を提供しない母系制に帰する議論がある。家・田畑・子供が女に属する社会において男は確たる居場所を持たず、外世界から富・経験・名声を持ち帰ることによって、社会経済的地位と安らぎを得る、というわけだ。ミナンカバウだけをみていればそれなりに説得的な議論だが、都合が悪いことに、同じ母系社会でもヌグリスンビランの男は商人になることもなければ、出稼ぎに出ることもまずない。商人の有無については、マレーシアで研究をするうちに、両地域の対シンガポールの立地と、それに大きく関係する華人商人の歴史を考慮せずに理解することはできないと思うにいたった。マラッカ経由でシンガポールに近いヌグリスンビランと異なり、ミナンカバウの故地である西スマトラは、シンガポールから遠く離れている。シンガポールを基点に行き来する華人は多くなく、むしろスマトラの華人商人の拠点は、パレンバンやメダンなどの東海岸沿いの町に形成されたのである。

もう一例を挙げると、マレーシアもインドネシアも多民族国家だが、国民統合のパラメーターも、国民統合が目指す形も大きく異なる。改革（レフォルマシ）期以前のインドネシアにおいては、為政者は統一国家の解体を神経質なほどに懼れ、国民統合（プルサトゥ

アン)と非連邦制の単一統一国家(クサトゥアン)を強調し続けた。しかし、マレーシアでは政治的実権を握るマレー民族の結束(クサトゥアン)がもっぱら問題とされ、分離主義が懸念されることも減多になければ、マレーシア国民の和合(プルパドゥアン)が話題とされることも最近まであまりなかった。植民地文書に目を転じると、イギリス領マラヤでは中央省庁単位の年次報告書か、地方行政単位毎の役所別年次報告書が中心であるのに対し、インドネシアを統治したオランダの場合は地方行政官の引継ぎ覚書が中心であるというのも面白かった。英蘭両国の植民地支配のスタイル、場合によっては本国そのものにおける行政スタイルの違いなのか、マラヤと東インド両地域の政治文化状況と植民地権力との遭遇過程の中で形成された違いなのか。

両国を行き来し、考えるほどに、いろいろな問いが増殖していった。

新たな「学問」へ向けて

マラッカ海峡を越えることによって、マレーシアについて学問するようになっただけでなく、インドネシアについて、ミナンカバウについて、新しい視点から「学問」をする癖を身につけたことは、自分にとって大きな収穫だった。

今では、インドネシア、マレーシア以外の国・社会についても視野を広げたいと考えている。昨年から自分のこれまでの専門とは関係の希薄な「東アジア地域関係の中の日本」や「グローバル・ヒストリー」を意識し、「地域相関論」(日本人の起源から現代までを扱う日本史)、「地域変動論」(ホモ・サピエンスの登場からグローバル時代までを扱う人類史)を学部生相手に講義しているのも、自分なりに勉強して少しでも「学問」の幅を厚く・広くしたいとの思いがあるからだ。「専門違いの大風呂敷教師のモルモットにされて、気の毒な学生たちよ」との揶揄が、この文の読者のあいだから聞こえてくるような気がするが…。

定点継続調査の開始

1986年末の予備調査のあと、翌年初頭には調査村をヌグリスンビラン州、クアラ・ピラ地区の「伝統的」マレー農村に定め、フィールドワークを開始した。この村を調査村に選んだ理由のひとつは、1950年代末にアメリカ人類学者がここでフィールドワークをしており、その成果が村落データに裏打ちされた歴史的参照点を提供してくれるからだ。

それ以来、通常は年末から年初にかけて、あるいは初春に、1、2ヶ月ほどの定点調査を同じ村で続けた。100年ほどの村の社会史を調べ、まとめるのが目的だった。19世紀末までの稲作を中心とする村の生活リズムや娯楽と儀礼、植民地期の1900年代末に小農ゴム栽培が始まり経済生活・物質生活が劇的に変化したこと、第二次世界大戦後の小学校教師を中心とするUMNO(統一マレー人国民組織)の活動の活発化、1960年代後半に舗装道路が通ることにより集落形態がリボン状へと変容し、さらに近隣にマレー中学校が開校されることによって小学校の就学率・卒業率が飛躍的に向上したこと、婚姻法の改正や給与所得の割合の増大、家電に代表される物質的欲望の拡大により、夫婦間の依存度と紐帯が強まり離婚率が低下したこと、1980年代のインフラ整備、工業団地や都市への若年人口の

流出、それと呼応して起こった放棄田の拡大などなど、マレーシア全体のマクロの変化がミクロ・レベルにも反映されており、村で人々と話をするのはまことに興味深かった。これまでに4本の英文論文を『東南アジア研究』などに発表し、1本の未発表英文論文があるが、いまだに研究全体のまとめが出来ていないのが残念だ。

フィールドワークからTVワークへ

村で最後の調査をしたのは1993年1月から2月にかけてのことである。この年の4月に京大大学院人間・環境学研究科に東南アジア地域研究講座が設置され、そこで大学院教育に従事するようになった。「研究施設では研究に専念するのが仕事なり」といった古き良き時代の終わりである。1998年4月には京大大学院アジア・アフリカ地域研究研究科が新設され、東南アジア研究センターからAA研究科に移籍し、大学院教育とのかかわりがさらに深まった。ヌグリスンピランの村とほぼ同時並行的にスマトラの村でも定点継続調査を続けていたことから、時間が制約されるなか、力点の在り処を二者択一せざるをえなくなった。選択はスマトラの村だった。

それ以来、マレーシアを訪れなくなったわけではない。毎年とはいわないが頻りに訪れる機会はある。ただし、一回の訪問期間が2~3週間と短くなり、調査村に日帰りで行くことはあっても泊まることはなくなってしまった。残りの時間はなにをやっているかという、とても誇れた話ではないが、KLのホテル、マラヤ大学の宿舎、あるいはマラヤ大学の学生寮などに泊まり、もっぱら締め切り期日の迫った原稿書きをすることが多くなった。一度などは、サバのコタキナバルの海岸べりのホテルに泊まり、夕陽の研究と称して落陽を片目に原稿書きを続けたこともある。村落フィールドワークから滅法足が遠のいてしまったのである。

フィールドワークから足が遠のくに連れ心がけているのが、新聞をよく読み、テレビを見ることである。ただし、マレーシアの新聞は英語紙もマレー語紙も正直いってあまり面白くない。個人的には、シンガポールのストレート・タイムズのほうが情報盛りだくさんで、よほど面白いと思う。そうしたこともあって、この頃はマレーシアにいるあいだ、フィールドワークならぬTVワークをよくしている。

マレーシアのテレビ状況あれこれ

前書きがすっかり長くなってしまった。テレビの映すマレーシアである。私が村落調査を始めた1980年代半ば、村の水道や電気の供給は一定しておらず、私の寄宿先の村の家では、まだ白黒だったテレビを毎晩みられるわけではなかった。テレビが点いており、フィールドワークの整理に飽きたときなどは、私も家族に加わってテレビをみることがあった。ハントゥ（お化け）のドラマと往年のP・ラムリー映画が頻りに再演されていたのを覚えている。イスラームの聖日・金曜日は太陰暦では前日の木曜夜から始まり、この曜日の夜がゴールデンデイ、ゴールデンタイムなのか、木曜夜に50年代を頂点として多く作られたP・ラムリーの映画がよく放映されていた。KLを舞台とする映画で相方のサロマ

がスカートをはいていたり、身体の輪郭を覆い隠すマレー式ムームーのバジュ・クルンではなく、腰の線や胸の線がくっきりと出るサロンとクバヤ姿で登場するのが、30年間の時間を遡ってマレー・ファッションの変化を映し出していた。

8時頃になるとスンバヤン・イシャ（夜の礼拝）のため、テレビの通常番組が一時中断する。現在進行形の番組を中断してしまうという「暴挙」が、放送スケジュールに厳格な日本から来た身にはとても奇妙に思えた。独立記念日などの夜の公式娯楽行事は通常9時から始まり、時に12時まで続く。地域を問わず、この種の行事のテレビ中継は人気があり、真夜中近くまでテレビに釘付けになることから、翌日は寝不足とならざるをえない。こうした「不条理な」スケジュールになるのは、ムスリム政治家はスンバヤン・イシャを行なうのが建前であり、行事を中断せずに実施するには、このような時間帯にならざるをえないとの理解に達したのは、村落調査を始めてからかなり時間が経ってからのことだった。個人的理解は理解として、より本質的には、イスラームが国教であることの含意のひとつが、礼拝のための放送の中断ということだろう。

テレビ番組に意識的になったのは、勿論フィールドワークからTVワークに移行してからである。1990年代の前半だが、ホテルなどで見るのが中心だったためテレビはカラーで、この頃までにはチャンネル数も増えていた。フリー百科事典「ウィキペディア」のマレー語版で関連項目を参照すると、1963年にRTM1で始まったテレビ放送は、69年末にラジオ放送とともに本拠を現在のアンカサプリに移し、時間を置くことなくRTM2の放映が始まった。おそらくカラー放送も同じ頃からであろう。ふたつの国営放送以外の民間チャンネルの嚆矢はTV3で、放映開始は1984年のことである。しかしこれは、当初はKL近辺でしか電波を捉えることができなかった。その後1990年代末から2000年代半ばにかけて、衛星放送、ケーブル放送以外に、NTV7、8TV、TV9などが放送を始めている。

テレビ番組の多様化

テレビ・チャンネルの増加は明らかにテレビ番組の多様化をもたらしている。ひとつには、従来のマレー語と英語放送以外に華語やタミル語による番組が増えている。さらに、マレーシア製プログラムだけで複数チャンネルの番組を埋める制作能力がないのであろう、そして他方で、テレビ局には広告収入を通じて番組購入資金があるということなのだろう、外国製プログラム、とくに外国製ドラマの放映が盛んになっている。イギリス製やアメリカ製だけでなく、比較的安価と考えられるフィリピン・タイ・南米・中国・韓国製等のプログラムが放映されており、現在のマレーシアのテレビ番組はきわめて国際的である。

チャンネルの増加に番組制作能力が追いつかない状況は、多くの発展途上国に見られるに違いない現象だ。しかし、アニメ以外に日本発の番組がマレーシアでもインドネシアでも少ないのはどうしてなのか、——私にとっての新たな学問といえれば学問といえる。いずれにしても、マレー・ファッションが「イスラーム的」になり、一般に社会のイスラーム化が進んでいるのに対し、ペルー（のものだと思う）やフィリピンのドラマには婚外性交渉

あり不倫ありだが、にもかかわらずそれなりに人気があるのだから、この乖離の意味するところも気になる学問対象のひとつではある。

テレビ放送局側がこのような乖離を受容する理由のひとつは、自前の番組を作るよりは、外国製番組を買った方が安上がりだという資本主義的論理であろう。こうした論理を極端な形で示しているのが、近年爆発的な人気を得ているリアリティ・ショーといわれるジャンルで、その典型が“Malaysian Idol”、「マレーシアのアイドル」である。リアリティ・ショーについては後ほど考えることにしたい。

コーラスで謳い上げるプルパドゥアン

なし崩し的に TV ワークに移行したのは、プミプトラ政策が終了し、1991 年の「マレーシアの前途」演説においてマハティールが「バンサ・マレーシア」を口にし、この演説内容のちに「ワワサン 2020」、ヴィジョン 2020 として知られるようになった頃だった。この演説の中で明らかにされた九つの将来的重要課題のうち、もっとも基本的課題とされたのは、2020 年までに単一のバンサ・マレーシアを形成すること、そしてバンサ・マレーシアのもとでの国民統合を達成することだった。ここでの「バンサ」をどう理解するかについては諸説あろうが、ここではマレーシア国民と訳しておく。

こうした政治的背景があつてのことだろう、夜のニュースを挟んでよく流れた政府広報用の CM が印象的だった。「プルパドゥアン」をテーマにしたもので、若い女性がマレー人、華人、インド人、東マレーシアの少数民族などの民族衣装を身に着け、コーラスのハーモニーでマレーシアの国民的統一を象徴するかのようにして、プルパドゥアンを歌いかつ謳い上げるのである。歌っていたのは、国歌の“Negeraku”、「我が国」だったと思う。

プルパドゥアンとプルサトゥアン

プルパドゥアンは前出では和合と訳した。一般的には統一と訳されるマレー語である。マレーシアでは「マレーシア民衆〔人民〕の統一」(perpaduan rakyat Malaysia) や「国民統一／国民統合」(perpaduan nasional) といった使われ方をされることが多い。他方、インドネシアでプルパドゥアンに相当する言葉はプルサトゥアンで、スハルト時代に頻用された表現でいえば「インドネシア共和国の統一性と単一性」(persatuan dan kesatuan Negara Republik Indonesia) が典型である。

同じ「統一」を指す言葉が両国で違うものになった理由を推察すると、少なくともマレー語についていえば、プルサトゥアンは任意団体、アソシエーションをもっぱら意味するから、当然「統一」を意味する他の言葉を作る必要が存在した。インドネシア語では、プルサトゥアンは任意団体と統一の両方を意味し、両者に通じる語の意味は、「いくつかの部分からなる統一された結合」(Poerwadarminta, *Kamus Umum Bahasa Indonesia*, 1961) である。これは、オランダ植民地時代にナショナリズム運動を志向した組織が、しばしば複数組織の統合の上に形成されたことを考えれば理解しやすい。

ちなみに、両語の語幹となっている“satu”と“padu”は、それぞれ「ひとつ」と「密

集した、凝固した」などを意味する。私の個人的イメージとしては、プルパドゥアンが、多様だが「ひとつ」であることや多様なものが「ひとつ」になること（多様性の中の統一）を強調するのに対し、プルパドゥアンは違うものが仲良く交じり合う（ただし〔人種の〕垣塙ではない）ことを意味する。UMNO や PAS（イスラーム党）を支持するマレー人、半島各州のマレー人、半島と東マレーシアのマレー人、ジャワ系やブギス系のマレー人といった違いが存在しても、マレー人研究者の友人によれば、この違いを超克して「マレー人のプルパドゥアンを目指そう」といった語法は不自然に聞こえ、むしろ表現としては“kesatuan orang Melayu”だという。他方、面白いのは、イスラーム・コミュニティのプルパドゥアン（perpaduan Umat Islam）という句はきわめて自然に聞こえるらしい。それというのも、宗教は共有していても、マレー人、アラブ人、エジプト人、イラン人、インド人等々と、慣習や民族的背景において「ひとつ」ではないからだという。

つまり、この友人の解釈を踏襲すれば、プルパドゥアンの前提は、（たとえ宗教は同じでも）文化的・民族的に「ひとつ」ではない／「ひとつ」にはならない／「ひとつ」にはなれないこと、であるように思われる。1991年の英語による演説「マレーシアの前途」において、マハティールがわざわざバンサ・マレーシアとここだけマレー語を用い、それも「国民」とも「民族」とも理解できる「バンサ」を用いた裏には、「ひとつ」がどんなひとつかを、少なくとも現時点において明確にしようがないという現実が潜んでいるのではないだろうか。

プルパドゥアンをめぐる「学問」

本題からいささか逸れてしまうが、プルパドゥアンについていまま少し考えをまとめておきたい。言葉へのこだわりは、インドネシア語とマレー語というしばしば似て非なる二言語のあいだを行き来するようになって身につけた習慣で、しばしこの「良習」にお付き合い願いたい。

プルパドゥアン、それも「統一」の意味でのプルパドゥアンは、どうやらかなり新しい言葉のようである。これを考える手がかりとして、ここではスペースの関係上、英語の“unity”がマレー語でどのように訳されてきたかだけに絞り、みてみよう。1963年刊のウインステッドの『英語＝マレー語辞書』第4版（*An Unabridged English-Malay Dictionary*）で“unity”を引くと、“kesatuan”と出ている。ちなみに、同辞書のより古い版では“satunya”である。1979年初版のデワン・バハサの『二言語辞書』（*Kamus Dwibahasa*）では、「統一された状態」という一般的な説明のあとに、“unity”のマレー語として“keselaraan”、“persesuaian”、“kerukunan”、“keharmonian”（基本的にすべて和合、調和）があり、一番最後に“perpaduan”が出てくる。これが1991年初版の『デワン版英語＝マレー語辞書』（*Kamus Inggeris-Melayu Dewan*）になると、“unity”の第一義として“perpaduan”が挙げられ、第二義として“kesepakatan”（合意、合一）が挙げられている。プルパドゥアンが明確に「統一」の意味を獲得し、広く人口に膾炙するのは、おそらく1990年代になってからのこと、つまりマハティール演説以降のことである

うというのが、現在のところの私の結論である。逆にいえば、これ以前は、ブミプトラ優先が政策の中心であり、民族の和合を政治的アジェンダとする必要性は感じられなかったということになる。

とはいえ、これ以前にプルパドゥアンが、マレーシアの政治語彙に登場しなかったわけではない。マレーシアには「先生の日」というのがあり、毎年テーマが設定されている（マレー語版「ウィキペディア」の「Hari Guru」参照）。このテーマにプルパドゥアンが最初に登場するのは1980年のことで、テーマは「国家統一のための中核教育」（Pendidikan Teras Perpaduan Negara）だった。2度目は1995年で、テーマは「合意と和合がワワサンを成功させる」（Permuafakatan dan Perpaduan Menjayakan Wawasan）である。

1980年のテーマにプルパドゥアンが登場した背景については不案内だが、この前年あたりからアヌワール・イブラヒムに率いられたABIM（マレーシア・イスラーム運動）の活動や、ダクワと呼ばれるイスラーム主義的運動が高まっていたことが関係しているであろう。1995年については、マハティール演説以降の政策が関係していると思われる。というのも、別項で述べるように、90年代後半になると、マハティール政権はマレー人、華人といった民族的帰属意識を越えた「マレーシア人」意識、「マレーシア国民」意識を高め、愛国心を鼓舞するような動きを、明らかに推進・奨励するようになるからである。

ドラマのなかの単一民族社会

プルパドゥアンの強調の或る種の反映であるのか、1990年代前半にテレビで目にしたものに、華人俳優たちを中心とし、KLを舞台とするドラマの登場がある。それまでの香港製のカンフー映画とはまったく趣を異にするものだった。ただし、カンフー映画と同じく、言葉は華語が使用されていた。ドラマを見ていてなんとも奇異だったのは、KLで撮られているにもかかわらず、街にマレー人やインド人を見かけられないことだった。あとでマラヤ大学の先生に聞くと、監督も俳優も多くが香港から連れてこられた人たちだという。

このような華人ドラマと対をなすようにして、マレー人主役のドラマも当然これ以前から存在した。農村を舞台にしたものが多く、なかには都会に出た子供と村に残る両親を主人公にしたものもあった。いずれにおいても、マレー農村と「伝統的」マレー家屋、そして服装からして「マレー文化」の体現者であるマ・チ（おばさん）、パ・チ（おじさん）はドラマに不可欠な存在だった。マレー・ドラマはマレー・ドラマで、物の見事にマレー人だけで構成される世界の中で物語が進行し、華人やインド人は姿のかけらも見られなかった。つまり、プルパドゥアンがいわれ始めたのとは対照的に、90年代半ば頃までのテレビのマレーシア社会は、マレー人か華人の単一民族で構成されていたのである。私の知るかぎり、インド人の主役だけで構成されるドラマが、マレーシアで製作されたことはない。

ジャルール・グミラン、「輝条旗」の誕生

今日マレーシアを訪れる人は、テレビあるいは新聞でジャルール・グミラン（Jalur Gemilang）を目にし、耳にしない日はないだろう。ジャルール・グミランはマレーシア国

旗の愛称である。アメリカ合衆国の国旗をスターズ・アンド・ストライプス、星条旗というのに似ている。星条旗の範に倣えば、ジャルール・グミランはさしずめ輝条旗とでも訳せようか。ジャルールはマレーシアの 13 州とひとつの連邦政体を指す赤白計 14 本の筋（条）のことで、グミランは光り輝くことを意味する。インドネシア国旗の愛称サンサカ・メラ・プティ（Sangsaka Merah Putih）、紅白旗に相当する表現だ。

「ジャルール・グミラン」という命名の歴史は新しく、1997 年 8 月 31 日、独立 40 周年に当たってマハティール首相によって公表された（マレー語版「ウィキペディア」の「Jalur Gemilang」参照）。それ以来、従来以上に、風にはためく国旗をテレビでよくみかけるような気がする。「ジャルール・グミラン」という歌もあることから、風にはためく輝条旗は歌と共に放映されることが多い。おそらく 2000 年からであろうが、“Keranamu Malaysia”、「貴方ありせば マレーシア」という愛国歌が広報 CM で放映されるようになり、ここでも輝条旗は、マレーシア各地・各界で生活する人々の寸映にオーバーラップされて主役の座を占めている。

なお、国歌「我が国」も愛国歌「貴方ありせば」も、使用されている代名詞の“ku”と“mu”は親愛の情を示す代名詞の所有格ゆえ、どうみても私の訳は適切ではない。マレーシア人の心情をおもんばかれれば、「俺の国」「あんたがいるから」であろうか。しかし、これでは国家との関係を表現する日本語にならないところが、国語である日本語の特徴を示し、人民革命を経験しなかった日本における国民と国家の関係性のあり方を示しているように思う。

Malaysia Boleh!、「マレーシアはできる！」

「ジャルール・グミラン」の誕生以来、テレビでよくみかけるスローガンが“Malaysia Boleh!”、「マレーシアは〔成し遂げることが〕できる！」、である。それだけでなく、このスローガンに裏付けを与え、ジャルール・グミランの輝きを内外に示すような企画が 1990 年代末から数々企てられ、あるいは成し遂げられている——エベレスト登頂、南極横断、オリンピックでのバドミントンにおける金メダル獲得、「ジャルール・グミラン」艇による世界一周航海、国産車プロトンの「ジャルール・グミランⅡ」号による世界一周走破などである。これらの企画は準備段階からテレビで放映され、エベレスト山頂ではためくジャルール・グミランのように、番組では輝条旗の誇示・顕示がつきものである。これによって、国旗と国家に対する人々の誇りを育み、「バンサ」がなにを意味しようと、「バンサ・マレーシア」の一員としての意識を擲り、高めることを意図しているといえよう。

2000 年から、従来の独立記念日を取り込んで「独立月」（Merdeka Month、Bulan Kemerdekaan）が祝われるようになった。マレーシアの独立記念日は 1957 年にマラヤ連邦が独立した 8 月 31 日である。ところがサラワクとサバが独立したのは、マラヤ連邦・シンガポール・サラワク・サバの統合によりマレーシアが形成された 1963 年 9 月 16 日である。半島と東マレーシアのあいだの「独立記念日」の乖離は長いこと東マレーシアの人たちの不満のもとだった。これが 2000 年以降、8 月 17 日から 9 月 16 日までが独立月と

して祝われるようになったのである。初年の独立月のテーマは“Keranamu Malaysia”で、愛国歌「貴方ありせば」はこの年に作られたものであろう。独立月開始の8月17日には、輝条旗を掲げる一隊が半島の特定の州を出発し、丁度オリンピックのトーチ・リレーのようにして半島各州を回り、9月16日に東マレーシアにおいて独立月を閉める儀式を行なう。独立月にかかわる行事がテレビや新聞で取り上げられることはいうまでもない。

こうみてくると、マハティール政権最後の重要施策のひとつは、国民的誇りである新国際空港や新首都建設を含め、民族と地域を越えた「バンサ・マレーシア」意識の醸成、愛国心の涵養にあったといえるのかもしれない。

多民族化するドラマの世界

これも2000年代になってからの現象だと思うが、独立記念日前に流されるペトロナスなどのCMに、興味深い映像がみられるようになった。ラットの漫画『カンボン・ボーイ』ではないが、マレー人、華人、インド人の少年たちが地方社会で共に友達として過ごした子供時代、いわば無垢な幼い日のプルパドゥアンの関係を描き、次いで進学による別れを描く物語である。セピア色の画面で描かれ、古きよき時代への郷愁をそそる。この2、3年、これが一歩進み、マレー少女とインド少年の物語に発展している。子供時代にお互い淡い恋心を抱いた二人は、しかしインド少年が家族と共にインドに帰ることになったため離れ離れにならざるをえなかった。やがて大人になってマレーシアに戻ってきたインド青年は、かつてのマレー少女の家を訪ねる。家から出てきたのは、いかにもありそうな太目のマレー農村女性で、夫と子供も出てくる。夫は顔つきから推してインド人である！ここでの前提は、もちろんインド人がインド系ムスリムであるということである。

CM以外にも、ニュース番組のアンカーに、マレー人と共に華人やインド人が以前よりもはるかに多く登場するようになってきている。そして、こうした傾向と軌を一にするようにして、多民族の主役からなるドラマが作られるようになってきてもいる。その走りは2000年前後から始まったと思われる“Gerak Khas”、「特殊作戦」であろう。警察の特殊部隊が、麻薬ギャング団の摘発などに活躍するドラマだ。残念ながら、初期の主役の民族的背景がどうなっていたのかは私には不明である。しかし、この2、3年についていえば、ドラマの中心人物である5人ほどの特殊部隊には華人やインド人の警察官が含まれている。

2004年後半から2006年前半まで放映され、評判になったのが、“Mahligai Gading”、「象牙の城」である。タイトルは、ドラマの中心的なマレー家族の当主が経営する会社の名前である。KLを舞台とする富裕な家族たちの話で、マレー家族以外に、これと友人関係にある華人家族、インド人家族も登場する連続ドラマである。異民族間の恋愛があり、画面で飛び交う言語はマレー語、英語、華語とさまざま、会話に使用される言語によってはマレー語、華語などの字幕がつく。一話ごとに完結する「特殊作戦」と異なり、連続ドラマの「象牙の城」がどのような物語の展開となるのか気になったが、マレーシア滞在中のみの鑑賞のため筋を追えないのがもどかしかった。「象牙の城」と同時期に、マレーシア制作の広東語ドラマ“Tin Gei Bin”（黄金の鎖）も放映されている。子供時代から友人関

係にある華人とマレー人の話とのことだが、残念ながら私の TV ワークからは漏れてしまった。

こうした現象を指摘したところで、「たんなるテレビ・ドラマの話じゃないか」という向きもあろう。しかし、このようなドラマは 10 年前には想像だにできなかったわけで、この変化がなにを意味するのか、これまた新たな学問の種ではある。

実力と競争の世界か? : 「夢の学院」と「マレーシアのアイドル」

既述のように、この数年間、爆発的な人気を得ているテレビ番組がリアリティ・ショーと呼ばれるジャンルである。リアリティ・ショーはプロの役者や芸能人などが出演しない番組で、クイズ、ドッキリカメラ、タレントスカウト・ショー、現在欧米で流行っている「追い落としショー」とでも呼べるものなど、さまざまである。最後のものは、一般参加者から選ばれた者何人かを島や一軒家に集め、一週間ごとに脱落者を不人気投票の互選によって決め、最後まで残った者を勝者とするといった番組である。この間、カメラが、「追い落としショー」参加者の生活の様子を逐次、番組で伝える。いずれも、素人ないし視聴者の参加を骨子とする番組といえようか。

マレーシアといわず東南アジアで圧倒的に人気があるリアリティ・ショーは、タレントスカウト・ショーである。マレーシアでは“*Akademi Fantasia*”「夢の学院」と、“*Malaysian Idol*”「マレーシアのアイドル」が有名である（英語版「ウィキペディア」の当該項目を参照）。前者は 2003 年に始まり今年が 4 回目、後者は 2004 年、2005 年と開催され、今年の開催はキャンセルされている。両者ともに何千人というオーディションを勝ち抜いた参加者が、最後の 10 週間、テレビで歌や踊りを披露して勝ち抜き競争を行ない、10 週目まで残った 2 人のあいだで勝利した者がチャンピオンになる。テレビでの勝ち抜きは、基本的に視聴者からの SMS（携帯電話メッセージ）による投票に基づき、投票がもっとも少ない者が毎週脱落していく。番組の人気が高いことから、テレビ局にとってはもちろんのこと、携帯電話会社（2005 年の「マレーシアのアイドル」の場合、決勝における SMS の数は 160 万件以上だった！）、チャンピオンを歌手として売り出すレコード会社、各業種スポンサーなどにとって魅力の番組といってよい。

両番組の勝者のプロフィールで面白いのは、チャンピオンはかならずしも人口数で優勢なマレー系に限られないことである。「マレーシアのアイドル」のチャンピオンは、初代がインド系女性、2 代目が華人系男性で、「夢の学院」でも華人系男性が初代チャンピオンになっている。両番組ともに、視聴者は出場者の歌唱力や表現力などよりはルックスで投票している、ゆえに真のタレントスカウトではないとの批判に晒されており、「マレーシアのアイドル」の場合、2005 年の華人男性チャンピオンの選択がとくに激しく批判され、これが、2006 年の番組制作が断念された理由のひとつだといわれている。これに劣らず激しい批判は、「夢の学院」の 2005 年チャンピオン（マレー系男性）にも向けられたということで、民族的背景とルックス偏重批判を結びつけることはできそうもない。

才能に基づくにしろ、ルックスに基づくにしろ、テレビや SMS という資本主義的媒体

を通して選ばれたアイドルが、民族的思考や感情の回路から解放され、人気投票という或る種の競争原理によって決定された結果、インド系や華人系のマレーシア人だったということは、以前であったならば想像できない出来事であろう。これも、あるいは、「バンサ・マレーシア」へと向かう地殻変動のひとつなのかもしれない。毎年のSPM（マレーシア高等学校修了証）やSTPM（マレーシア高等教育課程修了証）の国家試験のあとで、全国の成績優秀者の氏名リストが新聞に発表されると、往々にしてリスト内の民族的優劣が巷で話題とされる。しかし、「夢の学院」や「マレーシアのアイドル」の人気投票結果は、これとは違った雰囲気を醸し出しているように思う。

ポリガミーをめぐるドラマ登場の背景は？

昨年夏にマレーシアでの短期滞在中に気がついたことのひとつは、ポリガミーをめぐるドラマである。“Duri”「棘」と“Sanggar Madu”「複婚の館」は2時間の単発ドラマで、“Mengapa Harus Ada Cinta”「なぜに愛が必要か」は連続ドラマである。いずれも、第1夫人と第2夫人の葛藤を描く場面が多かった。

統計的にいってマレーシアでポリガミーが増えているのかどうか、私自身は知らない。マラヤ大学の50代男性教員の中で最近第2夫人を娶ったという事例は、いくつか聞いて知っている。おそらく実際に増えているのではないかと思う。マレー農村での生活の場合、孫が生まれてしばらくすれば、夫婦が寝室を共にすることは滅多にない。夫は寝室を出て家のベランダ近くに移り、夫婦どちらかが、あるいは孫が多ければ夫婦それぞれが孫と寝ることが多く、この時点で性生活は終わりを告げるといってよい。村では40代半ばまでに孫が生まれるのが普通だから、早い時期での性生活の終焉である。かつて、若い娘を持つ多くの親から結婚の申し込みがあった高名かつ高齢なイスラーム教師ならいざ知らず、マレー農村では祖父・祖母となった男女は比較的早い時期での性生活の終焉を受容しているか、世間体を考えて諦めているであろうし、そうすることが村の慣習である。

ところが、1960年代、70年代頃から都会へと移動したマレー中間層では、こうした習慣はないだろうと私は想像している。村人とは価値観や生活習慣、住居様式が異なり、孫と一緒に生活している夫婦も少ないと思うからだ。1990年代になると、これらの男は50代である。ブミプトラ政策とマレーシアの経済発展の恩恵を受け、経済的に恵まれた生活を送り、大学教授や会社社長、政治家のような地位に上り詰めた人も少なくない。まだ肉体的にも元気で性的関心も強い。そもそも、巷には性関係の情報が以前とは比べものにならないほど溢れている。しかし、妻はセックスに関心がないか、閉経を過ぎていれば性行為そのものが苦痛である可能性が高い。夫も妻に関心を失っているかもしれない。一方、性規範の締め付けが厳しく、人目が光っている村の小世界と異なり、都市には性的想像を掻き立てる刺激が充満し、異性との出会いの機会も多種多様である。そこで、男はうずうずしてくることになる。「悪いこと」に、こうした男は、婚期を逸しかけた娘や若後家などにはそれなりに魅力ある標的である。

イスラームがこれらの男にとって「不便」なのは、婚姻制度の外の性関係は認められず、

とくにイスラーム主義の影響のもと、愛人を囲うことは大きな社会的リスクを伴う。宗教警察が活発なことから、“*tangkap basah*”、「現場を押さえられる」、日本的表現を借りるとすれば、「濡れ場で捕まる」ようなことにでもなれば、社会的対面を傷つけられ、さらには経済的凋落や政治的失脚等も招きかねない。そこで、うずうずしている男に残された道は、妻の不興と逆鱗に触れることを恐れながら——こうした男の妻は比較的高学歴でプライドも高いだろうから、そうでなくとも女性にとって耐え難い複婚をすんなりと受容するとは思われない——、南タイなどで秘かに第2夫人との婚姻を遂げる。

なぜ南タイかという、イスラーム法の実践の仕方が異なる国境越えの南タイ・イスラーム地域では、マレーシアで求められる第一夫人の同意書などを含む面倒な書類手続きを必要とされないからだ。かくして、イスラーム法に則り第二夫人を迎えた夫を前に、第一夫人は離婚を迫るか、いずれは既成事実、*fait accompli*を受け容れざるをえない。先に、うずうずしている男にとって、イスラームは「不便」だと書いたが、考えようによってはしごく「便利」な宗教ともいえる。第一夫人の怒りが収まり、家庭の平和がある程度取り戻せれば、男は第二の青春と夢想するもの（現実には妻たちの確執に挟まれ針の筵だとも聞く）を正々堂々と享受できるのだから。

上は、私が勝手に想像しているシナリオだが、当たらずといえども遠からず、ではないだろうか。

セックスを扱えないテレビのあり様

ポリガミーがドラマで取り上げられる背景には、実際にポリガミーの増加があるのではないか、そしてポリガミーがもたらす家庭内の問題を社会的に身近に感じる視聴者が増えているのではないか、というのが、私の解釈である。これに加えて、マレーシアのテレビにおけるセックスの扱い、より正確には、イスラーム主義に配慮する必要があるためセックスを扱えない、それもとくに婚姻制度外の性関係をドラマで扱えないという縛りが効いているのではないか、と思っている。こうした状況にあっても、貧しい時代であったならば、貧しさに耐えて助け合う親子の愛情、親孝行、立身出世、身分差によって引き裂かれる男女関係などを、ドラマのテーマとすることができた。経済発展の時代には、村に残された親と都会に出た子供のあいだの種々の葛藤が大きなテーマであったろう。

しかし、経済的に豊かになり、ドラマの中心的舞台が都会へと移行している現在、これまでのテーマを繰り返すことはとみに難しくなっている。かといって、婚姻制度の外で展開する男女の性関係を、マレーシアのテレビ・ドラマで取り上げるわけにはいかない。もちろん、ハントウ（お化け）もの、そしておそらくP・ラムリーの映画も、通時代的に「安全な」ジャンルだが、これだけで番組を構成するわけにはいかない。

これも、ポリガミーについてと同じように、私の勝手というか豊かというか、想像の域を出ないが、マレー人を含むマレーシアの若者は、親の世代よりも性的にアクティブになっているのではないだろうか。都会に生活する者が多く、セックスに関する情報の入手が容易になり、ピア・グループ（同年代仲間）の影響力が増大し、親の監視の目を逃れて若者

が異性と時間を共に過ごす割合が増えているはずである。これはシンガポール・マレーの事例だが、近年マレー青年層のあいだで結婚の低年齢化が進んでおり（同時に離婚も増加している）、それと連動して、出来ちゃった婚が増えているという（“Helping Malay Community Tackle its Woes: Remain positive about negative numbers,” *The Straits Times*, September 3, 2005）。ムスリムにとって墮胎という選択肢はなく、また自分の子供、とくに娘に性的関係が疑われる場合、娘が相手との結婚をどう思おうと、親はほぼ強制的に婚姻を進める。シングル・マザーは宗教的にありえない話である。

上のような状況であればこそ、余計のこと、テレビで性を扱うことは憚れる。世論の批判を浴びるからだ。そこで、ポリガミーにいたる過程やポリガミーがもたらす葛藤、「象牙の城」のような異民族間の恋愛問題、あるいは都市犯罪がドラマの新たなテーマとなる。さらには、ドラマの筋立てを考える必要がなく、若者に圧倒的に人気のあるリアリティ・ショーや歌番組、サッカー中継などが制作者側やスポンサーに大いに歓迎されるのではないだろうか。いささか穿ちすぎた解釈かもしれないが。

婚内性関係にしる、婚外性関係にしる、セックスを扱えればテレビ番組の多様化が促進され、すべて OK、というつもりはまったくない。しかし、イスラームの影響のもとでセックスを扱えない状況がテレビ番組の構成にどのような影響を与えているかは、今後「学問」してよい対象だと思う。

なお、これは余談だが、「多民族化するドラマの世界」で紹介したペトロナスのコマーシャルは、左右田直規さん（東京外大）の教示によると Yasmin Ahmad の手になるものだという。彼女は 2004 年の『^{ほそめ}細目』(Sepet) と 2005 年の『困惑』(ないし『混沌』か) (Gubra) という映画で知られる監督で、続きものともいえる二つの映画は、同一のマレー少女を主人公とし、異なる華人青年との恋愛を描いている。マレー語版「ウィキペディア」の当該項目でマレー人に激しく批判されているように、マレー人売春婦や夫婦のセックスも話題にされているという。当然、監督の創作意欲の問題もあろうが、茶の間に直接届くテレビよりは、映画のほうが性を取り扱い易いのかもかもしれない。

いつの日かフィールドワークへ

この巻頭言は、通常のそれより長くなるだろうとは予測していた。それでも、いくら長くとも 400 字詰め原稿用紙 10 枚で収まるだろうと書き出した。終わりに近づいてみれば 40 枚を越す長さである。書いているうちに、思考がいろいろな「学問」へと広がっていった。書いている本人には書きながら楽しいことの多い原稿だったが、ここまでお付き合いいただいた読者には、ご苦勞様でしたと慰勞と感謝の意を表したい。

このエッセーを書いてみて、TV ワークも捨てたものではないと思う。とはいえ、私の本業はフィールドワークである。自分のマレーシア研究にそれなりに区切りをつけるためにも、いつかはフィールドワークに戻りたい。その日が早く来ることを念じつつ、筆を置くことにする。